

巻頭言

映画『エレファントマン』
が教えるもの

畑 埜 義 雄*

医療は「治療」と「ケア」からなっている。医療にケアの概念が入ったのは、ホスピスケアではないだろうか。中世ヨーロッパの小さな教会で、尼僧たちが病気や怪我で旅の続行が困難な巡礼者、孤児や貧困者などの世話をすることがホスピスケアの始まりである。ヨーロッパにはこの「ケア」が医療の中で延々と根付いている。1980年に出された映画『エレファントマン』は19世紀の実話に基づいている。主人公のMr. Merrickは少年期より頭蓋形成異常により顔が象のような様相になる。大変醜い顔貌である。両親が死んだ後、彼は興行師に引き取られ、見世物として生きていた。ある日、それを見た王立ロンドン病院の外科医Dr. Trevesは病院理事会に働きかけ、見世物ではなく、生涯病院で生活できるように尽力する。そして、入院することが許された日、病室でMr. Merrickは「Do you cure me?」と尋ねる。外科医Trevesは、「No, no, we can't cure you. But, we can care for you.」と答える。1950年代の外科医にcureとcareの概念が根付いているのである。西欧ではこの概念が医療の根幹となって発展しているように思われる。1967年にはMiss. Cicely SaundersによりSt. Christopher's Hospiceが設立され、現代緩和ケアの草分けとなった。現在ではイギリスを始めとするヨーロッパ、カナダ、アメリカには多くの緩和ケア施設ができています。

日本の「ケア」はいつ始まったのか？ 麻酔科的視点から見ると、華岡青洲が、当時押さえつけて手術を行うことが当たり前の時代に、麻酔薬『通仙散』をつくり、全身麻酔下で手術を行った

(1804年)。患者の苦痛を除去するための試みであり、医療における「ケア」の営みであった。そして200年後の現在、青洲の「ケア」精神は生きていますか？ 2000年の統計では、がん性疼痛に対する麻薬の使用量では、日本は人口比にして世界の約40位である。「ケア」を重視する欧米諸国は当然上位を占めている。現在の日本の医療の原点は？ 私は産業、医療、教育などは第二次大戦後に起源を持つのではないかと考えている。戦後、日本はどん底にあったこれらを脅威の速度で復興をもたらした。1964年には新幹線ができ、東京オリンピックが開催された。しかし、産業・工業の発展を最優先にしたことにより水俣病など世界の4大公害病をもたらした。環境が犠牲になったのである。医学面では、多くの科学者が米国などに留学し、医学、診断・治療学が大きく発展し、世界の一流国になっている。CTの保有台数は世界一である。華岡青洲以後、「ケア」の概念が根付かず「治療」が優先され、国民も提供される治療学の進歩を享受している。それでも、日本の緩和医療の歴史から見ると、1970年には緩和医療が紹介され、1981年には浜松の聖隷三方原病院、続いて淀川キリスト教病院に緩和ケア病棟が開設され、「ケア」はキリスト教をベースにしている。これから日本も生命の長さよりはQOLを求める医療になり、「ケア」の概念が培われるかもしれない。そして、医療を取り上げたテレビや映画のドラマでcureとcareを区別した台詞がいつでてくるだろうか。

*和歌山県立医科大学麻酔科